

A 幼稚園における発達障がい児への幼児体育指導の実践 ーレクリエーションを幼児体育指導に取り入れることの有効性の検証からー

松岡邦明¹ 田村禎章²

【要旨】

岐阜県と一般社団法人岐阜県レクリエーション協会では岐阜県民が1つはレクリエーション活動を実践し、健康長寿につなげる「ミナレク運動」を推進している。その一環として本研究ではA幼稚園で実際におこなった幼児体育指導について事例紹介し、指導前後の考察を行った。その結果、幼児期における運動は心身の発達において非常に重要であることが確認できた。しかし、課題として特に発達障がい児への体育指導では「できる」「できない」がはっきり表れてしまうため、発達がゆるやかな子にとっては、とても嫌な場面になってしまう可能性があることがわかった。その対応策として、障がいがあるなしに関わらず幅広いレクリエーション活動を体育指導に取り入れることが有効であることがわかった。どのような園児でも楽しみながら身体を動かし、運動することの楽しさを知り、継続的に取り組むことが非常に重要であることが示唆できた。

【キーワード】

レクリエーション、幼児体育指導、運動遊び、発達障がい児支援

1. はじめに

障がいを持つ子どもにとって、その子どもが持つ能力や今後発達する可能性を最大限に伸ばし、本人の自立や社会参加に必要な力を培うことが重要である。つまり、一人ひとりの現在の状況や保護者や本人のニーズに応じ、多様な学びの場において適切な指導と必要な支援を行う必要がある。

現在、幼稚園、小・中学校及び高等学校における特別支援教育については、学習指導要領等において、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成するなど個々の児童生徒等の障がいの状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的・組織的に行うこととなっている。

¹ (一社)岐阜県レクリエーション協会ミナレク運動担当次長・羽島市立西部幼稚園幼児体育指導員・

大垣女子短期大学非常勤講師・ユマニテク短期大学特別講師

² ユマニテク短期大学准教授・中部学院大学非常勤講師・(一社)岐阜県レクリエーション協会専務理事

また、2018年8月には「学校教育法施行規則」（昭和22年文部省令第11号）を一部改正し、特別支援学校に在籍する幼児児童生徒、小・中学校の特別支援学級の児童生徒及び小・中学校、高等学校において医療・福祉・保健・労働等の関係機関等と当該児童生徒等の支援に関する必要な情報の共有を図らなければならないこととなっている。具体的には通級による指導を受けている児童生徒について、個別の教育支援計画を作成することとし、当該計画の作成に当たっては、当該児童生徒等または保護者の意向を優先するものである。

特別支援教育担当教員の養成は、大学等の特別支援教育関係の教職課程等において行われている。また、幼稚園、小・中学校及び高等学校の教員養成においても、2017年11月の「教育職員免許法施行規則」（昭和29年文部省令第26号）の改正により、教職課程において「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に関する科目を必修化したところである。2019年4月から、中央教育審議会の審査に基づき、文部科学大臣の認定を受けた大学において新しい教職課程が始まっている。さらに、教員免許更新制における免許状更新講習において、必修領域の事項の一つである「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む。）」の中で特別支援教育に関する内容を扱うことが規定されている。

特別支援教育は、発達障がいも含めて、特別な支援を必要とする子どもが在籍する全ての学校において実施されるものである。通常の学級に在籍する障がいのある児童生徒に対しても、合理的配慮の提供を行いながら必要な支援を行う必要がある。

2019年5月1日現在、特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級の在籍者並びに小・中学校及び高等学校の通級による指導を受けている児童生徒の総数は約56万人であり、増加傾向にある。このうち義務教育段階の児童生徒については、義務教育段階の全児童生徒数の約5.0%に当たる約48万6千人である。

本稿では、2016年度より一般社団法人岐阜県レクリエーション協会（実施当時は、特定非営利活動法人）の幼児体育の専門指導員が、発達障がいの有無に関わらず、レクリエーションを取り入れた幼児体育指導を行った実践経過について述べてその効果を考察するものである。

2. 発達障がい児の現状

発達障がい児の存在が社会で一般認識されるようになったのは、2002年に初めて文部科学省が「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の実態調査が行われてからである。調査によると、発達障がいの可能性のある子どもが6.3%いるという結果が公表された。調査から2年後の2004年に発達障がい児の

早期発見と支援を促す「発達障害者支援法」が成立した。2006年から発達障がい児は通級指導の対象となり、場合によっては特別指導の学級へ転籍することもありえる。2002年の調査から20年経った現在、日本は少子高齢化が進み子どもの人口が減少する一方であるにもかかわらず、逆に「発達障がい」と呼ばれる子どもは増え続けている。図1に示すように2006年では発達障がいの児童数は7千人余りだったが、2019年の13年間でおよそ10倍の7万人を超えてしまった。これは、発達障がいと認定される子どもが増え続けている事を意味し、今後も増加傾向を示すことを意味する。

この状況は、教師が児童の発達障がいと判定する運用になってからで、クラスの在籍率や有病率を示すように学校現場に広がっていったことが一因と考えられている。

2002年から「発達障がい」が話題になり、教員が子どもを見る目が変わり始めた事が増加した原因といわれている。これまでは「手がかかる子」で済んでいた児童が、何らかの問題行動があるとすぐに発達障がいと疑われるようになってきた。さらに医師に受診すると何かしらの診断名がついてしまう事例も多い。

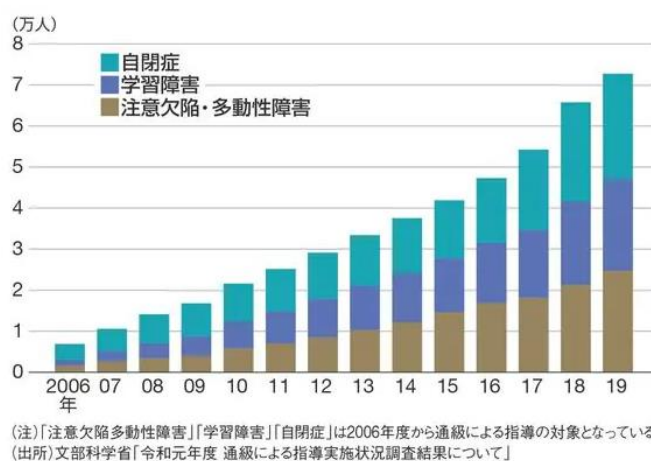
もし、発達障がいを早期発見した場合でも「通常の学級での指導や支援があれば普通学級で生活は可能である。しかし、現場の教師にその知識や経験が乏しいため、児童への対応の工夫がなされないまま安易に特別支援学級への転籍が検討されてしまうケースが多くなってしまったと考えられる。

3. A幼稚園における障がい児の状況

3-1. 2016年度の状況

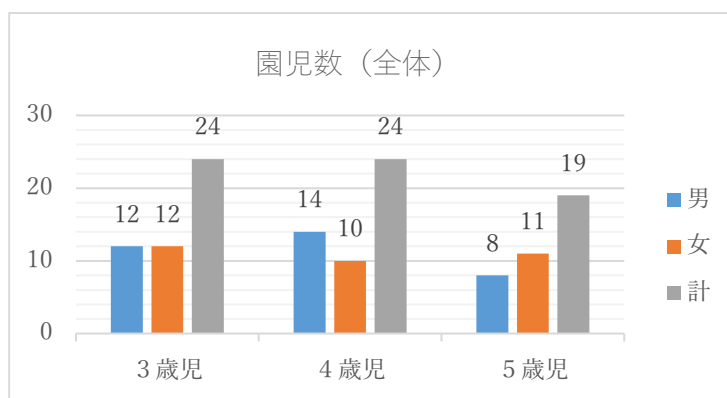
A幼稚園では、3歳児24名中、男3名・女3名、4歳時24名中、男6名・女1名、5歳児19名中、男6名・女2名の障がい児または、発達支援センターに通級・相談を含む（グレーゾーン）子が在園していた。

図1 発達障がいの児童生徒数



2016年度園児数（全体）

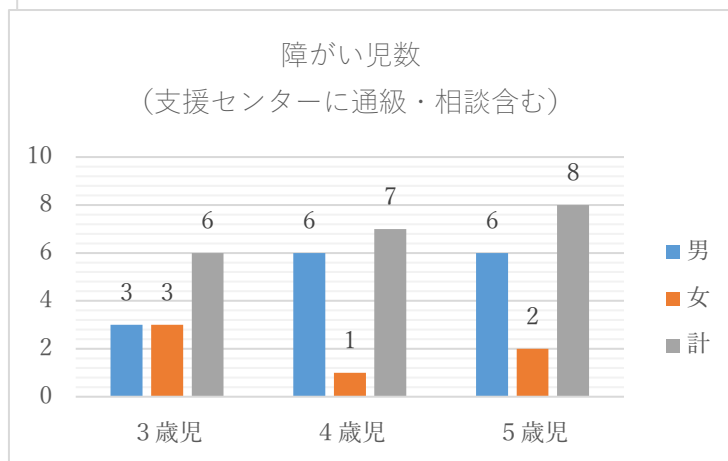
	男	女	計
3歳児	12	12	24
4歳児	14	10	24
5歳児	8	11	19
計	34	33	67



2016年度障がい児数

※支援センターに通級・相談を含む

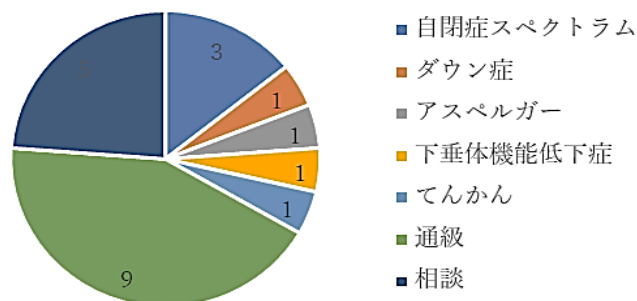
	男	女	計
3歳児	3	3	6
4歳児	6	1	7
5歳児	6	2	8
計	15	6	21



A 幼稚園の園児数から見ると全体的に男子に障がい児または、グレーゾーンの園児が多い。ここで言うグレーゾーンとは、発達障がいの特性を持つものの、診断基準を満たさない状態を指す通称である。

通園児の障がいの種類は、自閉症スペクトラム、ダウン症、アスペルガー、下垂体機能低下症、てんかんがあり、支援センターに通級・相談している子を除くと自閉症スペクトラムの子が多く見られる。

2016年度通園児の障がいの種類

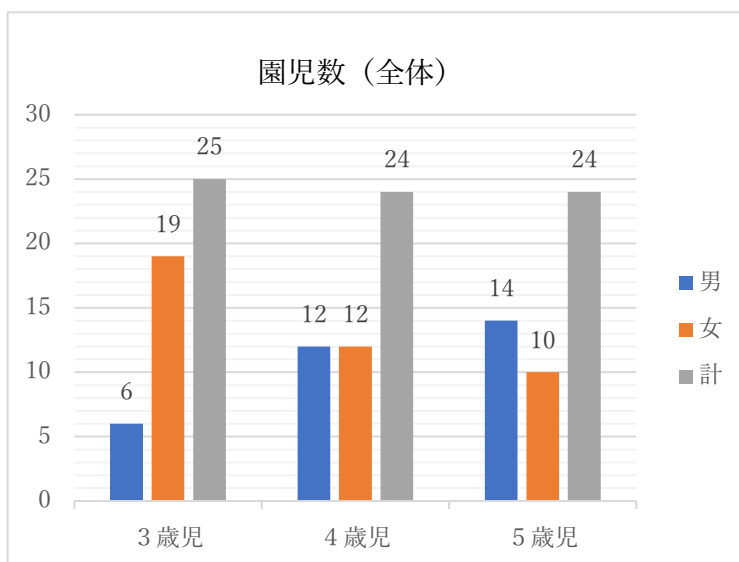


3-2. 2017年度の状況

2017年度のA幼稚園では、3歳児25名中、男2名・女3名、4歳時24名中、男3名・女3名、5歳児24名中、男6名・女1名、の障がい児または、発達支援センターに通級・相談を含む（グレーゾーン）園児が在園している。2016年度に続き当協会指導者がレクリエーションを取り入れた体育指導を行っている。

2017 年度園児（全体）

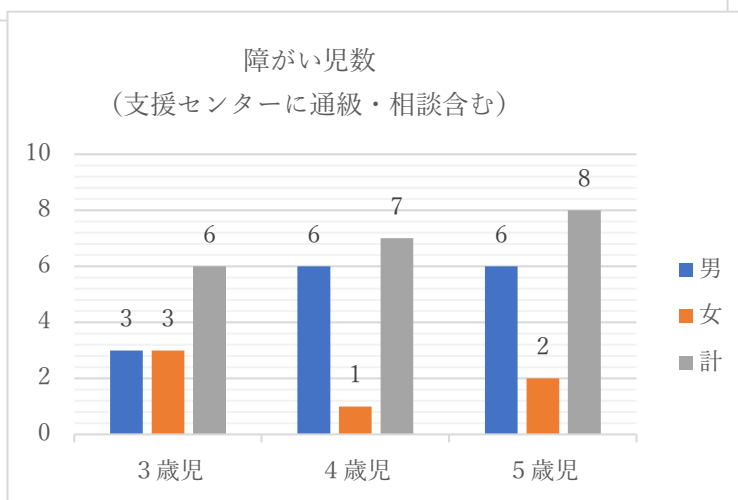
	男	女	計
3 歳児	6	19	25
4 歳児	12	12	24
5 歳児	14	10	24
計	32	41	73



2017 年度障がい児数

※支援センターに通級・相談を含む

	男	女	計
3 歳児	2	3	5
4 歳児	3	3	6
5 歳児	6	1	7
計	11	7	18



全体の園児数から見ると女の子の方が在園数が多いが、障がい児または、グレーゾーンの園児は男児に多く見られる。障がい児支援に対応するため、クラス担任も1名ではなく、各クラスに3名ほどで対応している。ダウン症の園児には1対1で支援している。

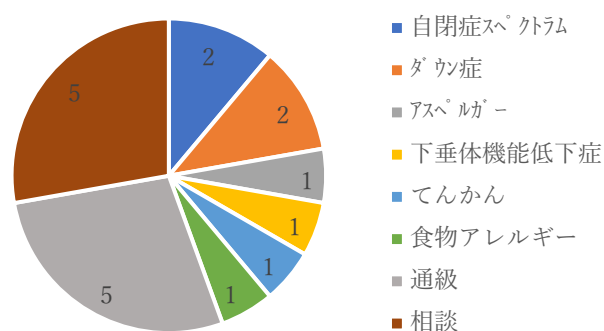
障がいの種類は、自閉症スペクトラム、ダウン症、アスペルガー、下垂体機能低下症、てんかん、食物アレルギーがあり、発達障がいの特性を持つものの基準は満たさない、いわばグレーゾーンの児童が多く在園している。

A 幼稚園児の主な障がいである自閉症スペクトラムは、大きく2つ特徴がある。

①コミュニケーション障がい

様々な場面で人とのコミュニケーションや関わりに難しさが生じる。視線が合わなか

2017年度通園児の障がいの種類



ったり、1人遊びが多く、他人と関わろうとするとパニックになるなどの特徴がある。

②独特のこだわり

興味や関心が狭い範囲に限られやすく、独特のこだわり行動や振る舞いが見られる。このような特性は子どもによってどの特徴が強く出るか、またどの程度の強さなのかも園児によってまちまちである。ケースバイケースで、その子に合った対応や言葉かけが必要である。

体育指導の時は、同年齢時との運動遊びが十分にできず、ついていけない状況がしばしば見受けられる。そのため、運動することに苦手意識を持ち運動することが嫌になると、心身の発達にも影響を及ぼしかねない。障がいを持っている子が同年齢児との体育指導を楽しむためにはどうすれば良いかを考えた。レクリエーションを通して、他人とのコミュニケーションを図り、笑顔で先生や友達とふれあい、楽しいと感ずることができるよう体育指導を行うように努めた。

ダウン症の特徴は、知的発達の遅れを伴う場合が多くダウン症特有の顔立ちなど、典型的な特徴をもち合わせている。難聴や視覚障がい（遠視や乱視）を併発するなど合併症を持つことも多く、小さいころは、風邪を引きやすかったり心臓にトラブルが起こったりといったように、虚弱体質の子どももいる。ただし、個人差が激しく、このように重い合併症にかかる子どももいれば、合併症がほとんど無い子どももいる。ほとんどの場合は成長すると共に身体は強くなっていくことが多い。発達の様子を正しく理解・認識して、その子にあった環境を用意することがポイントとなってくる。ダウン症の子どもは、成長のペースがゆっくりだと言われているが、親子のふれあい遊び、療育などを通して、全般的発達を促していくことができると考えられている。

このようなことから、運動の楽しさと多様な動きが体験できるように、A 幼稚園では2016年度より、年間約40回、1回につき40分程度のレクリエーションを取り入れた幼児体育指導を行った。

4. 2016年度の体育指導のねらい・計画・実践

(1) 年間のねらい（全体）

- ① レクリエーションを活用し、思いやりとふれあい、そして笑顔を育てる。
- ② 自分の体を十分に動かし、積極的に運動しようとする。
- ③ 明るく伸び伸びと行動し、健康で安全な生活に必要な基本的な生活習慣や態度を育てる
- ④ 外遊びを十分に行い、遊びの中できまり、協力、役割などを体験し体を動かす楽しさを味わう。

3 歳児ねらい

- ① 基本的な運動機能が育ち、歩く、走る、跳ぶ、転がるなどの動きを十分に経験する。
- ② 自ら進んで運動遊びに参加する。
- ③ 遊びの中で多様な経験をし、全身を使って固定遊具や体操器具で運動遊びをする。

4 歳児ねらい

- ① 年少組で経験した基本的な動きが洗練され、さらに用具などを操作する動きを十分に経験する。
- ② 友だちと一緒に運動することの楽しさを知る。
- ③ 先生の話の聞き、メリハリのある態度を身につける。

5 歳児ねらい

- ① 年中組で経験した“幼児期に経験する基本的な動き”の組合せができるようになる。
- ② 複雑な動きの遊びや様々なルールがある遊びを経験し、友達と力を合わせ役割分担して遊ぶ。
- ③ お手本となる姿勢で体育に望むことができる。

(2) クラス別年間計画

3 歳児 ※10月から体育指導スタート
10月・11月・12月 ・レクリエーションで運動遊びを楽しむ。 ・レクリエーションや体操器具（マット運動）で運動遊びを楽しむ。 ・体操器具（平均台）で運動遊びを楽しむ。
1月・2月・3月 ・短なわとび、長縄で運動遊びを楽しむ。 ・ボールで運動遊びを楽しむ。 ・サーキット遊びを楽しむ。

4 歳児
4月・5月・6月 ・レクリエーションで運動遊びを楽しむ。 ・鬼ごっこで友だちと一緒に運動することの楽しさやルールを知る。 ・体操器具（マット運動、鉄棒）で運動遊びを楽しむ。
7月・9月 ・マット運動で前転ができる。

<ul style="list-style-type: none"> ・かけっこで運動遊びを楽しむ。
<p>10月・11月・12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱で乗り降りができる。 ・鉄棒でことり、ふとん干しができる。 ・軽スポーツ体験
<p>1月・2月・3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短なわとび、長縄で運動遊びを楽しむ。 ・ボールで様々な運動遊びを楽しむ。 ・サーキット遊びを楽しむ

<p>5歳児</p>
<p>4月・5月・6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レクリエーションで運動遊びを楽しむ。 ・いろいろな鬼ごっこで集団運動することの楽しさとルールを知る。 ・体操器具（マット運動、鉄棒）で運動遊びを楽しむ。
<p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マット運動でたくさんことができる。
<p>10月・11月・12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱で開脚跳びができる。 ・鉄棒で補助有の逆上がりができる。 ・軽スポーツ体験
<p>1月・2月・3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短なわとびで前跳び、後ろ跳び、長縄ができる。 ・サーキットで複雑な運動遊びができる。 ・ボールで戸外または室内での運動遊びを楽しむ。

(3) 実践報告

①3 歳児

【ミナモダンス・運動遊び】

- ・体育指導の準備運動として、「ミナモダンス（岐阜県が推奨しているリズムダンス）」を行った。踊りが分からなくても、先生を見て、マネをして笑顔で曲にのることができた。

写真1に示したミナモダンスは、体全身を使ったアクティブな振り付けが多いダンスである。子どもたちにとって

全身を動かす楽しい動きは、ミナモダンスに興味を持つための導入指導（アイスブレーキング；取り組みやすいきっかけづくり）として最適であった。

- ・運動遊びでは、用具を使用せず集団で遊戯室を歩く・走る等の動きや、動物・乗り物等に変身して四つん這いで歩く、ジャンプする等の動きを行った。
- ・障がいを持っている子の中には、一度の説明で理解がしにくく立ち止まる子や、集団に入れず同年齢児と一緒に運動をしない子がいた。説明がなかなか理解できない子に対しては、個別に言葉がけをし、担任の先生と一緒に行うことで、楽しいと感じ積極的に体を動かすことができた。



写真1：ミナモダンスによる準備運動

【マット運動】

- ・マット運動遊びでは、マット運動に慣れるため家に見立てて素早くマット運動の上に乗ることや、色のあるマット運動を使用し、指導者が言った色のマット運動に乗る遊びを行った。
- ・マット運動の上を走る、跳ぶ、転がる等動物や乗り物に変身をして、模倣遊びを行った。具体的に運動のやり方を指導し、見本を見せて、「やれそうだ」、「やってみよう」という気持ちになるように配慮した。さらに写真2のでんぐり返し（前転）の補助の様に指導員が安全に配慮しながら、子ども達の運動の補助をすることで、これまでできなかった前転ができるようになる。子ども達にとって昨日までできなかった運動が今日できるようになることは、「やればできる」という自信につながる。運動動作の一つの前転であるが、子どもにとって達成感としての満足度は大きい。

- ・障がいを持っている子の中には、指導者の言葉を理解してすぐ行動することが難しかったが、ルールは変えず見立てるものを変更するなど、飽きがこない程度に続けることで趣旨を理解して笑顔で取り組むことができた。
- ・運動遊びに入れないう子には、全体での体育指導が終わった後、個別に時間を設けて指導を行った。指導者や担任の先生と一緒にいれば、積極的に運動遊びに取り組むことができる場合があるため、どこでつまづいているかを把握し、どの程度の力を持っている、どの程度の力を発揮できるかをしっかり把握する必要がある

【平均台】

- ・平均台遊びでは、横歩きや前進で渡る等、バランス感覚や集中力を必要とする遊びを行った。初めはすり足で渡る子や、慌てて渡る子がいたが、そのような子には「ゆっくり1歩ずつやろう」、「平均台をよく見て落ちないように」と具体的に声をかけた。
- ・補助が必要な時は指導者と手をつないで渡り、自分で1歩進むことができたときには、たくさん褒めた。障がいがある子、ない子とも同様に取り組むことができた。



写真2：でんぐり返し（前転）の補助

【サーキット遊び】

- ・今まで経験した動きを楽しみながらできるサーキット遊びを行った。用具を活用し、子どもの運動能力に応じて様々な運動の仕方や遊び方ができるコースを作った。
- ・障がいを持っている子も、みんなで一緒に取り組むことができ、苦手な運動があっても遊びの選択の幅があり取り組みやすく、自ら進んで運動遊びに取り組む子の姿が見られた。

②4 歳児

【運動遊び】

- ・写真3の運動あそびでは、「お好み焼きひっくり返すゲーム」として相手の子をお好み焼きに見立て上の子は寝そべっている子をひっくり返す動作を行う。下の子はひっくり返されないよう



写真3：運動あそび

お好み焼きひっくり返すゲーム

に力を入れて我慢する動作を行い、
お互いが適度な力比べをする動作が
楽しい。

- ・運動遊び友達とジャンケン遊びや、くぐる、跳ぶ等たくさん触れ合って体を動かす。ジャンケンの理解が難しいと感じる場面があったが、先生と一緒にいることで、理解をして運動遊びを楽しむことができた。
- ・外遊びを十分に行うことで、友達とふれあい、笑顔が見られ、声も出て楽しい雰囲気で行うことができた。

【マット運動】

- ・マット運動を使用した模倣遊びからスタートして、走る、跳ぶ等の動きを行った。両足一緒に跳ぶことは難しいが、指導者と一緒に手をつなぎゆっくり行うと上手にできた。
- ・ダウン症の子は両足でジャンプすることが好きになり、何度も挑戦していた。体育指導が終わった後も、ジャンプ遊びを楽しんでいる姿が観察できた。
- ・横転や前転などを基本に、転がることを経験し、バランス感覚や回転感覚を養った。
- ・運動習得には、興味・関心や成功体験が大きく影響するため、運動遊びの中で子どもが注目し、やってみたいと思わせるような楽しいレクリエーションを取り入れた運動遊びを行った。

【鉄棒】

- ・鉄棒遊びでは、特に「スモールステップ（少しずつ達成度を確認しながら指導していく方針）」で指導をするよう注意した。初めに怖い痛い経験をしてしまうと、鉄棒に触ろうとしない子がいるため、鉄棒にさわることからスタートした。
- ・鉄棒をにぎる、ぶらさがる、おなかをつける、頭をさげる、補助ありでまわる、補助なしでまわる等「できる」「できた」褒められた経験が次につながり、喜びや達成感を感じた。
- ・挑戦したことも大いに褒めるようにし、ハイタッチ等、ふれあってコミュニケーションを図った。
- ・できるだけ興味をもたせ、スモールステップで成功体験から進め、運動に自信が持てるように取り組んだ。

【なわとび】

- ・なわとびは、手の動きと体の動きが異なるため、跳ぶことが十分にできず苦手意識を持たないように、初めはなわとびを下において前後左右に跳ぶことからスタートした。
- ・鉄棒と同じようにスモールステップで取り組み、体の横でなわを回す、大きく回して跳ぶ等成功体験を進め自信が持てるよう取り組んだ。
- ・体育指導以外の時間にも、なわとびに取り組む子の姿が見られるようになった。

【ボール遊び】

- ・ボール遊びでは、転がしドッジボールを行った。最初はボールに当たらないように避けることからスタートした。ルールが理解できないうちは何度かボールに当たってしまう子の姿が見られた。
- ・次第に目や手足などを一緒に動かすことで、脳に刺激を与え、運動続けていくことで体の使い方が上手になり、避けることができるようになった。1つずつ段階を踏んでいき、できたら褒めて認めるようにした。
- ・少しずつ転がすスピードを速くする、ボールを2つにする等、運動の難易度をあげていき無理なく継続してできるよう工夫した。

③5歳児

【運動遊び】

- ・友達や先生と外で鬼ごっこやジャンケンをしてふれあい遊びを行った。体全体を使って行う体操などは、心を開放して他人との共感や信頼を学ぶ効果もある。
- ・健常児の遊びと全く同じで、ねらいも基本的には異なることはないが、障がいによって運動遊びの内容や細かい指導法を工夫し、楽しいと感ずることができるよう配慮した。
- ・体を動かすことで、筋肉などの身体的発達を促すことができ、バランス感覚や、柔軟性も向上することができた。

【マット運動】

- ・前転や後転といった技に挑戦した。つまずいた時には具体的に伝え、段階を下げて「できた」となるよう成功体験を進め、自信が持てるようにした。
- ・他の子が行なっている時は、初めはじっと待つことができず、立ち上がる子の姿が見られた。危険がなければあえて関心を示さないようにすることで、自らかまって

もらえないことを理解し、立ち上がるなどの行動が減った。

- ・少しずつ並ぶ順番を理解し、お手本となる姿勢で取り組むことができた。

【鉄棒】

- ・一度怖い経験をしてしまうと、健常児であっても苦手意識を持ってしまい鉄棒が嫌いになってしまうことがある。苦手意識を持たせないよう、指導者や先生と手をつないで回る足抜きまわり等を行った。
- ・安心した中で、鉄棒に少しでも興味を持てるようにしたことで、外遊びのとき写真4のように自ら鉄棒遊びをする子の姿が見えた。



写真4：逆上がりに挑戦

【跳び箱】

- ・跳び箱を使った遊びを行い、跳び箱に慣れることからスタートした。写真5の様に跳び箱を山に見立てて登る、跳びおりる等、子どもが楽しみながら自発的に取り組みたいと思うような遊びを行った。
- ・ジャンプをしながら手をたたく、目標のところまで跳ぶ等、初めは動きの組み合わせができなかったが楽しく繰り返し続けることで、写真6のように幼児でもとび箱ができるようになった。
- ・ダウン症の子は、平衡感覚や筋力が弱く、運動に制限がある場合があり、安全に注意しできる範囲で行うように言葉をかけた。高いところからのジャンプを大変気に入り、何度も繰り返しダイナミックにジャンプ遊びを体験していた。



写真5：とび箱を山に見立てて登る・跳びおりる運動



写真6：とび箱（開脚とび）

【短なわとび・長縄】

- ・なわとびを地面において前後左右に跳ぶ、なわとびで円を作りグーパージャンプ等リズムよく両足で跳ぶことから始め、少しずつ段階を上げていく指導を行った。
- ・なわを飛行機のプロペラに見立て体の上や横でなわを回す等、なわに親しみがもてるように取り組んだ。そうすることにより、自発的になわとびをまわす子の姿が見られた。
- ・跳ぶことに苦手意識を持たないように、できたら褒める、つまずいている場合はどこでつまずいているかを具体的に言葉がけするようにした。
- ・長縄にも挑戦し、初めにタイミングをつかむため、なわをくぐり抜けることを行なった。
- ・自分だけではタイミングを合わせにくいため、指導者が合図を出して、手をつなぎ一緒に行なった。跳ぶ必要がなく簡単に組みあわせるため楽しみながらできた。
- ・徐々に自分でできるようになり、さらに長縄を楽しむ姿が見られた。

【ボール遊び】

- ・ドッジボールを行った。チームやクラスでの遊びをとおして競争心や協調性が芽生えた。
- ・負けても相手をほめたたえることやルールを守ってみんなで楽しく遊ぶことを学んだ。
- ・集団の中で自分の役割を知ること、責任を果たすようになり、社会的行動がとれるようになった。
- ・ボール遊びの場合、発達障がい児は、能力に差が目立ち、恥ずかしい体験が、体を動かすことが嫌になることがある。また、上手くコミュニケーションがとれないため集団で運動遊びが楽しめなかったり、ゲームの理解やチームプレー等、ルールが分からないため参加できなかったりする。そのため先生と一緒にコミュニケーションを図り、楽しみを中心とした遊びを多く取り入れた。

5. 2017年度の体育指導のねらい・計画

(1) 年間のねらい(全体)

『みんなで楽しくレクリエーション・運動遊び』

- ① 「ミナレク運動」を通して、体・心・頭の健康、思いやりとふれあい、笑顔を育てる。
- ② 楽しみながら体を動かし、運動好きの子を育てる。
- ③ 体を活発に動かすことの喜びを知り、積極的に運動しようとする。

- ④ 健康、安全について望ましい習慣を身につける。
- ⑤ 運動遊びを通して、きまり、協力、役割などを理解して、実行する。
- ⑥ 支援が必要な園児には、分かりやすい達成目標を与え、意欲を高め主体的に運動しようとする。

3 歳児ねらい

- ① 運動遊びを通して体を動かすことの楽しさを知る。
- ② 基本的な運動機能が育ち、走る、跳ぶ、転がる、バランスをとるなどの動きを十分に経験する。
- ③ 集団の中で仲良く行動し、ルールを学び、思いやりの心を育てる。

4 歳児ねらい

- ① 友だちと一緒に体を動かすことの楽しさを知る。
- ② 年少組で経験した基本的な動きが洗練され、さらに用具などを操作する動きを十分に経験する。
- ③ 先生の話聞き、メリハリのある態度を身につける。

5 歳児ねらい

- ① 体を活発に動かし、満足感を得る。
- ② 年中組で経験した“幼児期に経験する基本的な動き”の組合せができるようになる。
- ③ 目標に向かって集団で行動したり友達と力を合わせたり役割を分担して遊ぶ。
- ④ お手本となる姿勢で体育に望むことができる。

(2) クラス別年間計画

3 歳児 ※10月から体育指導スタート

月	領域	内容	目標
10	集団行動	整列、挨拶、約束 レクリエーション	指導員や先生、友達に慣れる
11	集団行動 ダンス	ふれあい遊び、模倣遊び (ミナモダンスコンテスト)	コミュニケーションを図る リズム感覚を養う

12	マット運動 鉄棒	マット運動遊び ぶらさがり、豚の丸焼き	運動の基礎となる感覚や動作を身につける 高さ、逆さ等空間感覚を体験する
1	相撲 平均台	(おおずもう大会) 横、前、後歩行	押す、引く等の動作を体験する 平衡感覚を養う
2	なわとび ボール	大縄跳び ボール追いかけ、拾い、転がす	持久力の向上、リズム感覚を養う ボールの特性を生かし、全身を使って遊ぶ
3	ボール サーキット	転がしドッジボール サーキット遊び	ボール運動の基本となる動作を身につける 走、跳、バランス等の運動を連続的に行う。

4 歳児

月	領域	内容	目標
4	集団行動 隊列移動	整列、挨拶、約束 レクリエーション	指導員や先生、友達に慣れる メリハリのある行動を取る
5	マット運動	マット運動遊び 前転	前転の習得
6	鉄棒	ぶらさがり、豚の丸焼き	高さ、逆さ等空間感覚を養う
7	プール	模倣遊び 顔つけ、バタ足	水に慣れる バタ足の習得
8	夏季休園	—	—
9	運動会練習	かけっこ	走り方の習得 競争意欲の向上
10	鉄棒	足抜きしり抜き回り、前回り 降り	様々な回り方習得
11	平均台 ダンス	前、後、障がい物歩行 (ミナモダンスコンテスト)	平衡感覚を養う リズム感覚を養う
12	跳び箱	跳び箱遊び よじ登り、とび移り	高さに慣れる 跳躍力を養う

1	相撲 なわとび	(おおずもう大会) 前跳び	押す、引く等の動作を体験する 連続前跳び 10 回を目指す
2	なわとび ボール	後跳び、大縄跳び ボールに慣れる (投、取、 蹴)	様々な跳び方の習得 ボールを使用した基本動作を身につける
3	ボール サーキット	転がしドッジボール、 サーキット遊び	簡単なルールを理解し楽しむ。 走、跳、くぐる等の運動を連続的に行う

5 歳児

月	領域	内容	目標
4	集団行動 隊列移動	整列、挨拶、約束 レクリエーション	指導員、先生に慣れる 考えて行動を取る
5	マット運 動	マット運動遊び 前転、後転	柔軟性の向上 前転、後転の習得
6	跳び箱	よじ登り、両足踏み切り 開脚跳び	高さに慣れる、跳躍力を養う 開脚跳びの習得
7	プール	模倣遊び バタ足、ふし浮き	水に慣れる バタ足、ふし浮きの習得
8	夏季休園	—	—
9	夏季休園	—	—
10	鉄棒	逆上がり	逆上がりの習得
11	サーキッ ト ダンス	サーキット遊び (ミナモダンスコンテスト)	多種多様な動きを複合的に取り入れる リズム感覚を養う

指導計画時には、幼児体育指導者と担任とのコミュニケーションを多く図り、具体的に話をして、楽しく体を動かし「やれそうだ」「やってみよう」の気持ちを育て、成功の体験をさせることに主眼をおくことを意識した。そして、運動好きの子を育て、笑顔いっぱい明るく前向きな園生活を送ることを目標とし、子どもの自発的な遊びを中心とした、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基礎を養うことを大切にすることを重視した。

子ども達は少しのきっかけがあればこれまでできなかったことが、写真 9 や写真 10 のようにできるようになる可能性を秘めていたこともわかった。子ども達のパフォーマンスを引き出すきっかけ作りが幼児体育の指導のポイントとなる。また、障がいあるなしにかかわらず楽しめるよう工夫し、子ども一人ひとりにとって望ましい方法や援助を考えることが重要である。



写真 7 逆上がりに挑戦



写真 8 開脚とびに挑戦

6. 保護者アンケートの実施

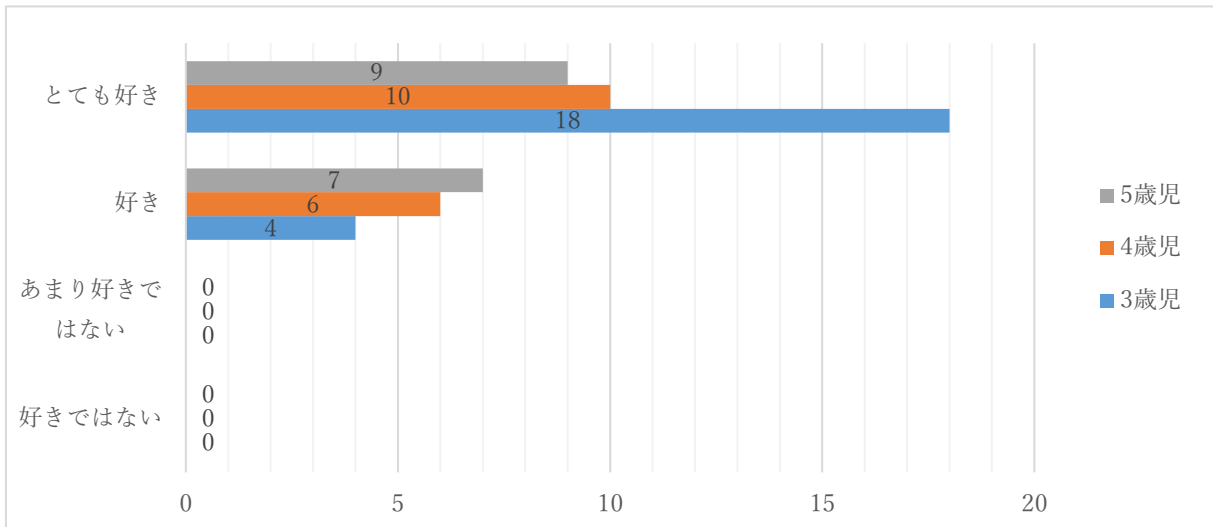
発達障がい児に配慮した幼児体育指導がより良い活動へとカリキュラムを発展させるための検討資料とするためにアンケート調査を実施した。アンケート内容は保護者からみた子ども達の家庭の様子や保護者の意見を明らかにするものであった。個人情報を守るために無記名の自記式アンケートを 2017 年 6 月に実施した（アンケート用紙は文末に掲載）。

保護者アンケート結果（2017 現在）

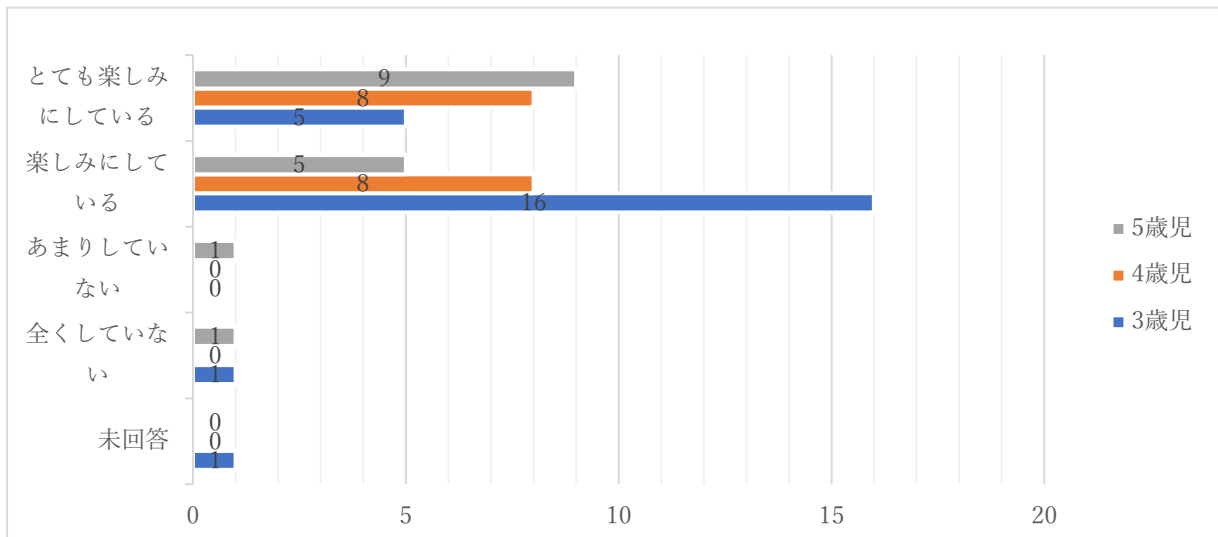
年齢	配布数	回収数	回収率
3 歳児	24	23	95.8%
4 歳児	24	16	66.6%
5 歳児	19	16	84.2%
合計	67	55	82.0%

【お子さんの様子について】

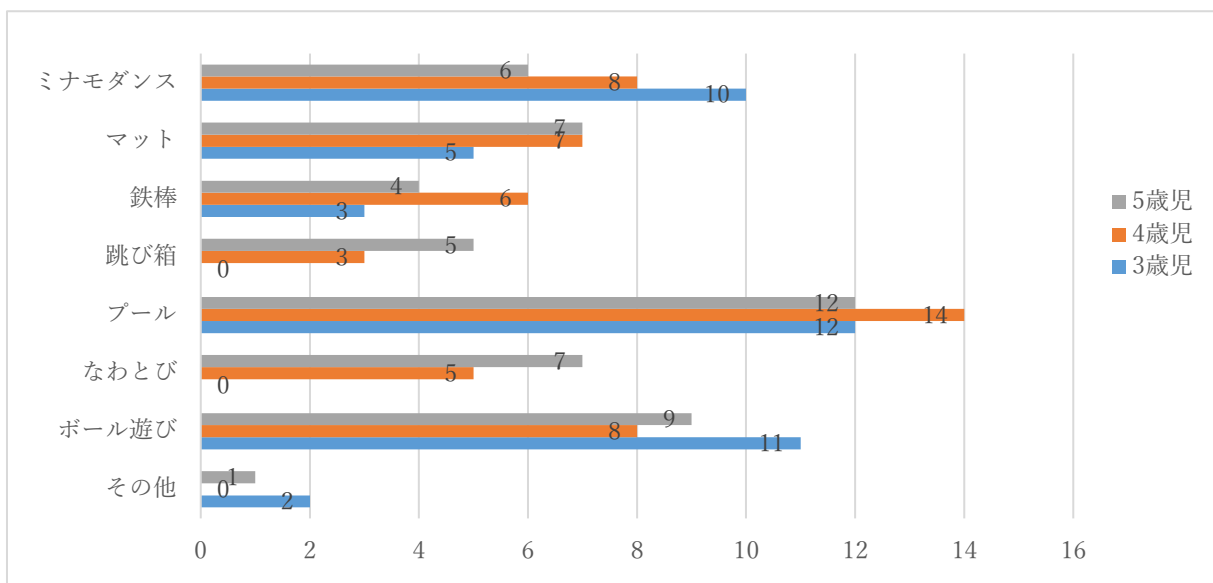
○体を動かして遊ぶことは好きですか。



○体育指導を楽しみにしていますか。

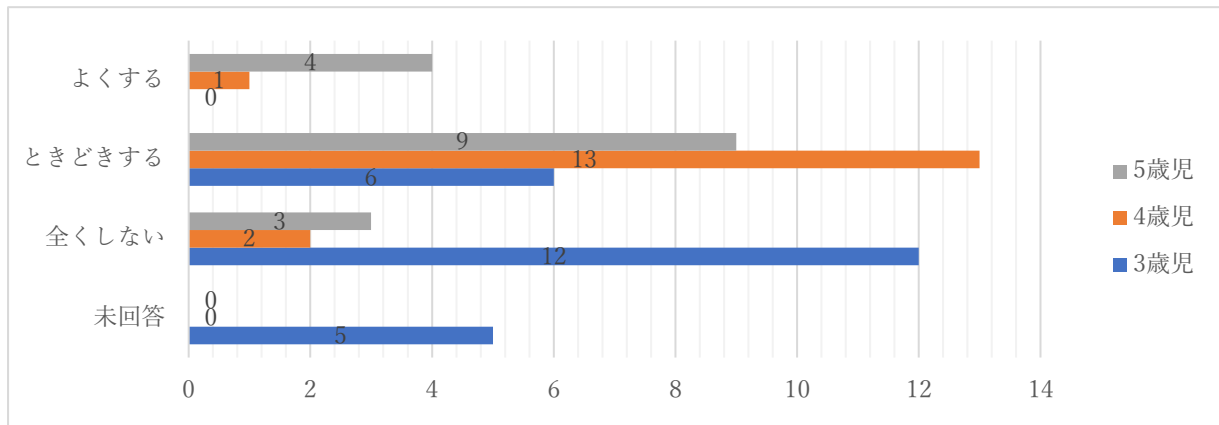


○体育指導で好きな運動はどれですか（複数回答）。



【保護者の方について】

○お子さんと体育指導について会話をしますか。



アンケート調査の結果より、体を動かして遊ぶことが好きな子、体育指導を楽しみにしている園児が多くいることがわかった。3歳児はアンケート時点では、体育指導がスタート前であったため、アンケート調査をした6月時点では、家庭で体育指導についての会話が少ないことがわかった。アンケート調査から、自発的に運動遊びに取り組むことを目指し、体を動かすことが好きな子どもを育てることが重要となることがわかった。また、保護者の方と子ども達が体育について会話が增えるように安全で楽しい体育指導が望まれていることがわかった。

7. まとめ

2012年3月に文部科学省が公表した「幼児期運動指針」では、幼児を取り巻く社会の現状と課題として生活が豊かで便利になったことで、子どもにとって体を動かす機会を減少させていると報告している。また、地方の都市化や少子化が進展したことで社会環境や人々の生活様式を大きく変化させた。子どもが遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間（いわゆる「3間」）の減少、そして交通事故や犯罪被害の懸念などが、屋外で体を動かして遊ぶ機会の減少を招いているとも言われている。

子どもが自分のからだを上手に使う（運動能力を向上させる）ためには、①自分の事を知る、②力の加減を知る、③動作を変えることを自覚することが必要であると言われる。幼児期においてはこの3つの要素が重要であり、幼児期からの多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響していると言われている。文部科学省の調査（2011）では、外遊びをする時間が長い幼児ほど、体力が高い傾向にあると報告している。このことから、幼児期に外遊びを積極的にさせることが推奨されている。また、発育・発達からの側面から見ると、幼児期から小学校低学年までが最も神経系の発達が期待できるため、動作の機会を設ける

必要がある。こういった諸能力を育むためにも保育所・幼稚園等は重要な役割を担っている。日常生活の中で繰り返される頻度の高い動作において、例えば「体の使い方がわからない子ども」は他の発達障がいと重複するケースがあり、その場合は学習困難を伴いやすいとも言われている。そのため、一律のトレーニングメニューを考えることは非常に困難であるが、「その子の学び方で教える」というオーダーメイド型指導が最も重要であり、その考え方を広めていくことが必要と思われる。その面において、柔軟な指導方法において、多様な形態で状況設計ができる「レクリエーション」を取り入れた幼児体育指導は効果的であると言えよう。

保育所・幼稚園や家庭において、早期から運動を実施することを勧めるトレーニング方法では、成功しなかったトレーニングを「繰り返さない」ことが肝要である。できないことを繰り返してトレーニングすることは、本人にとって「苦痛」である。そのため、対応方法としては、①やり方を変える、②声かけや言葉を変える、③トレーニングの内容を分割する、など子どもの個性にあわせた工夫をすることが望まれる。また、「からだの使い方がわからない子ども」であっても、子どもは「基本的にからだを動かすことが好き」という本質を持っている。注意されることや失敗の恥ずかしさから、好きなのに「できない」「やりたくない」状態を作り出してしまうと、改善の機会を失ってしまうことになる。従って、本人が楽しいと思う遊び（レクリエーション活動）の中での運動遊びの工夫を行うことが望ましい。

保護者のアンケートの結果から、今回の指導実践では肯定的な評価が多かった。今後とも、子どもたちが楽しみながら身体能力を向上するカリキュラム研究に取り組みたいと考えている。その意味で多様性を重視する「レクリエーション」の考え方が、発達障がい児の幼児体育指導に与える意義や意味は大きい。

【補遺・謝辞】

本論文は、一般社団法人岐阜県レクリエーション協会の監修及び倫理的審査を受けている。また、幼児体育指導の具体的指導実践をイメージするための写真については、A 幼稚園及び保護者各位より承諾を得て掲載させていただいている。本論文の執筆及び各種調査にご協力いただいた関係各位へ謝辞を述べたい。

【参考・引用文献】

- 1) 文部科学省 HP「幼児期運動指針」「スポーツ基本法」<<https://www.mext.go.jp>>
- 2) (公財)日本レクリエーション協会 HP<<https://recreation.or.jp>>
- 3) 文部科学省 HP「障がい児通所支援の在り方に関する検討会」の報告書について<https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21746.html>
- 4) 金俊華他「発達障がい児支援における専門家と保護者の協働について」教育実践総合

5) 高橋晃他「広汎性発達障がい幼児に対する早期集中行動介入の効果についての検討」
岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 14、pp.503-516、2015

【参考資料：アンケート調査票】

A幼稚園保護者 様

岐阜県レクリエーション協会

幼児体育指導アンケート

このアンケートは今後の体育指導の参考にいたします。該当項目に○をつけてください。

個人情報は当協会の個人情報保護方針にのっとり適正に管理し公開されることはありません。またご回答いただいた項目は統計的に処理され個人が特定されることはありません。ご回答いただいた項目により回答者の不利益とならないことを誓約します。ご協力よろしくお願いします。

お子さんの様子について

○ 年齢

- ・ 3歳児 ・ 4歳児 ・ 5歳児

○ 性別

- ・ 男 ・ 女



○ 体を動かして遊ぶことは好きですか。

- ・ とても好き ・ 好き ・ あまり好きではない ・ 好きではない

○ 体育指導を楽しみにしていますか。

- ・ とても楽しみにしている ・ 楽しみにしている ・ あまりしていない ・ 全くしていない

○ 体育指導で好きな運動はどれですか。(複数回答可)

- ・ ミナモダンス ・ マット ・ 鉄棒 ・ 跳び箱 ・ ブール
・ なわとび ・ ボール遊び ・ その他 ()

○ 家庭や屋外などでどんな遊びをしますか。(複数回答可)

- ・ ボール遊び ・ なわとび ・ 三輪車 ・ 鬼ごっこ ・ 鉄棒
・ 水遊び ・ 砂遊び ・ 公園(ブランコ、滑り台等)
・ ブロック ・ ゲーム(TV、スマホ) ・ その他 ()

保護者の方について

○ お子さんと体育指導について会話をしますか。

- ・ よくする ・ ときどきする ・ 全くしない

○ 体育指導に求めるものは何ですか。(複数回答可)

- ・ 体力向上 ・ 挑戦する気持ち ・ コミュニケーション力 ・ 仲間とのふれあい
・ 思いやり ・ 健康づくり ・ その他 ()

○ お子さんの体などについて特に心配なことはありますか。

- ・ () ・ なし

○ お子さんの体力向上を含め体育指導についてご要望はありますか。

※お答え頂いた内容、個人情報等は一切公表いたしません。ご協力ありがとうございました。